

氏 名	矢 野 謙 善 太 郎
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 乙 第 70 号
学位授与の日付	平成 10 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	近代京都の東山地域における別邸・邸宅群の形成と数寄空間に関する研究
審 査 委 員	(主査) 教 授 日 向 進 教 授 西村征一郎 教 授 河 邊 聡

論文内容の要旨

本研究は、明治中期から昭和初期にかけて、京都の東山地域に造営された別邸・邸宅群の形成過程、及びそれらの形成を推進した要因を明らかにすることを目的としている。またこれらの別邸・邸宅群に共通して営まれた建築と庭園とによる「数寄空間」に、近代の「数寄空間」としての特質を見出し、建築史、あるいは茶道史のなかの建築分野に位置づけるとともに、別邸・邸宅群が成立する段階からその後の展開過程に関わってきた人物たちの動向を解明することによって、東山という地域固有の「近代性」を見出そうとするものである。(なお本論文では、茶の湯によるもてなしや茶会を主とした趣味的生活を可能とする建築・庭園で構成された場を「数寄空間」としている。)

本論文は 4 章で構成されている。

□第 1 章 東山別邸群の初期形成事情

本論文が対象とする近代の東山地域について、明治 23 年(1890)琵琶湖疏水第一期工事開通以降の状況を概観することにより、本論文を展開する背景を述べるとともに、東山地域での別邸群の形成が、琵琶湖疏水の開通と連動した風致保存政策によって積極的に誘引されたこと、また山縣有朋と伊集院兼常の二人が別邸・邸宅群形成の先導者として重要な役割を果たしていた可能性について論じている。

□第 2 章 東山別邸群と数寄空間の形成を促したいくつかの要因

東山地域の別邸群における数寄空間の形成を積極的に促したと思われるいくつかの要因について考察しており、山縣と伊集院が東京の政界有力者に京都での別邸造営を積極的に誘致していたこと、南禅寺近傍の住宅地開発に関与した人物の存在とその会社の活動について明らかにしている。また大正 4 年の大正大礼と昭和 3 年に行われた昭和大礼も京都における数寄空間の発展を促す要因となり、大礼に参列した皇族、貴顕の宿舎として別邸・邸宅群があてられたことによる数寄空間の形成におよぼした影響について考察している。

□第 3 章 東山地域における別邸造営の一動向 — 清水吉次郎別邸「十牛庵」をめぐって

別邸造営の一つの事例として大阪の両替商清水吉次郎の「十牛庵」を取りあげ、遺構と古図にもとづいてその建築的特色を明らかにし、清水家文書によって同人の別邸造営に見られる動向について分析、詳細に検討している。また大工や庭師たちが土地取引に積極的に関わっていたことを明らかにし、このことも近代の京都の別邸に数寄空間が普及していく要因の一つであったと論じている。

□第 4 章 洛陶会「東山大茶会」と数寄空間

大正 10 年(1921)11 月 19 日から 22 日まで東山地域に点在する寺社や別邸・邸宅群を会場に行われた、洛陶会主催の「東山大茶会」に注目し、当地域における別邸・邸宅群と数寄空間の形成過程のなかで、こ

の茶会が開催された意義について考察している。大正後期には別邸・邸宅が群として成立していたことが、大茶会の開催を可能にしたことを示している。そして、特に煎茶席が多いことは、近代の数寄空間のデザイン傾向を見る上で注目されること、東山大茶会の開催は、近代における茶会の場としての東山の存在を広くアピールし、建築や庭園の職人たちが自らの仕事を披露する絶好の場であったと論じている。

□結 章

以上の考察の結果をまとめ、整理している。

論文審査の結果の要旨

明治中期から昭和初期にかけて京都の東山山麓に、政治家や実業家など東西の貴顕たちによって多数の別邸・邸宅施設が造営され、建築と庭園による「数寄空間」が営まれた。琵琶湖疏水の水を導入することが別邸・邸宅造営の前提条件ではあったが、当地域に恣意的あるいは偶然に別邸・邸宅群が形成されたのではなく、京都の近代都市化という京都市の構想のもとで、風致保存地区とされた東山、南禅寺近傍という地域固有の性格を背景にして成立したものであったことが、丹念な資(史)料発掘によって得られた知見にもとづいて論じられている。

京都の代表的な近代数寄者の一人清水吉次郎は、東山地域において別邸を次々と構えて建築・庭園を整備し、比較的短期間に転売していたことが明らかにされている。このような動向は清水に特異なことではなく、他にも同様な動きが確認できることから、東山に形成された数寄空間に、共通した性格やプロトタイプ的な建築・庭園が存在していた可能性が推測されている。この点については税制という面からの検討など、今後さらに検討すべき課題を含んでいるが、数寄空間の「近代性」を解明するための興味深い指摘である。

さらに東山大茶会関係資(史)料を博搜、精査し、判明した40以上の施設について長年現地調査を積み重ねて所在を確認したことにより、東山大茶会研究の基礎資料が集大成された。また、この資料によって大半の遺構については建築年代や建築的特色などが明らかにされている。

以上の成果によって、近代京都東山地域の別邸・邸宅群のなかに成立した数寄空間の特質を解明することが可能になった、ということが出来る。

近代和風建築を日本建築史のなかに定位させるさまざまな試みのなかでも、「数寄空間」の展開に先進的な役割を負っていた京都を素材としており、本研究の意義は高い。

本論文の中心をなす論文のうち、次の2編が『日本建築学会計画系論文集』にそれぞれ審査を経て掲載されている。

- ・矢ヶ崎善太郎「近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情」、第507号、pp.213-219、1998年5月
- ・矢ヶ崎善太郎「東山大茶会の会場となった建築・庭園の所在地と造営時期 — 東山大茶会に見る近代数寄空間の研究」、第515号、pp.243-250、1999年1月

また1編は京都工芸繊維大学工学学部研究紀要『人文』、3編は『日本建築学会近畿支部研究報告集』、3編は『日本建築学会大会学術講演梗概集』で報告されている。